慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「立教学院展示館」の構想と活動
Sub Title	Concept and activities of "The heritage and future of Rikkyo (Rikkyo gakuin tenji-kan)"
Author	豊田, 雅幸(Toyoda, Masayuki)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2022
Jtitle	近代日本研究 (Journal of modern Japanese studies). Vol.38, (2021.) ,p.115- 147
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 学校史の展示とその展開
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20210000-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「立教学院展示館」の構想と活動

豊田雅幸

はじめに

立教学院では、一九九九年に創立一二五周年を迎えるのに合わせ、『立教学院百二十五年史』の編纂が行われ、プロジェクトが終了する二〇〇〇年三月までに資料集五巻、図録一巻の全六巻を刊行した。(1) 編纂終了後、「立教史」に関する資料の収集・整理・保存、および研究活動を行う機関として、「立教学院史資料センター」（以下、資料センター）が、二〇〇〇年一二月一日に発足した。(2)

立教の歴史に関する展示活動は、この資料センターの業務の一つとされ、二〇〇四年の創立一三〇周年記念展を皮切りに、例年、一〇月に実施されるホームカミングデーに合わせて展示会を開催するようになった。(3) し

かし、資料センターでは、展示のための占有スペースをもっておらず、展示会は、学内の他のスペースを借り、ごく短い期間だけ実施する形となっていた。そのため、展示スペースを確保し、常設展示を実現することは、資料センターにとっては大きな課題であった。

実現のためのプランニングは何度か試みられたが、全学的な施設利用計画との折り合いなども難しく、なかなか実現しなかった。しかし、立教学院創立一四〇周年となる二〇一四年五月九日、ようやく、立教初となる展示施設、「立教学院展示館」（以下、展示館）が、立教大学池袋キャンパスに開館した。

本稿では、この展示館の開設経緯を跡づけるとともに、展示館のもつ特徴とこれまでの活動、特に、展示館の重要な業務である、展示会の開催と教育利用の状況について述べ、これまでの成果と今後の課題について考えてみたい。

一　開館に至る経緯

（1）基本構想の策定

展示館の開館へ向けた直接的な契機は、立教大学池袋キャンパスの図書館本館機能の移転であった。立教大学の図書館本館は、旧館（一九一九年落成）と新館（一九六〇年落成）という隣接する二棟より成っていたが、その機能が、新たに建設される中央図書館（現在の池袋図書館）へ移転することとなったのである。

資料センターでは、二〇〇九年末から、この移転後のスペースを活用した展示施設の実現へ向けたプランの検討を開始し、翌二〇一〇年二月二六日付で、資料センター長名の提案文書「立教学院史資料展示施設新設の

提案（素案1）――図書館旧館の活用並びに新館との連携を目指して――」を、立教学院院長[4]へ提出した[5]。

提案文書のポイントは、以下の三点であった。

①学院特に大学教育の充実と研究の深化とに密接な関係をもって保存されてきた旧図書館の施設を、その歴史的系譜にふさわしく、展示施設として活用すること。

②旧館がキャンパス内に占めている位置を十分に生かして、展示活動の中心とすること。また特に新館（いわゆる丹下図書館）との有機的な連携のもとに充実を図ることに留意し、併せて、旧館施設の一部をアーカイブズの教育・研究活動や当センターの業務遂行に資するような配置を考えること。

③展示内容に関しては、学院・大学関係資料に限定することなく、小学校および中学高等学校等の資料展示にも十分なスペースを準備すること。

このように、資料センターからの提案は、東京都の歴史的建造物にも選定されている図書館本館・旧館を展示施設の核とし、新館との連携も視野に入れながら、大学アーカイブズとしての資料センターの機能充実を目指したものであった。また、大学だけではなく、小・中・高の各校展示のスペースを確保することにも重点を置いたものであった。

この提案文書は、同年六月一八日の教学常務会[6]において、常務理事会宛[7]の提案文書「立教学院アーカイブズの充実と展示施設の整備について」とともに紹介され、「本学院の沿革資料、歴史的文書の積極的活用の推進、および社会的意義からも展示施設の必要性」が確認された[8]。その後、一年ほどの学院内での調整を経て、二〇一一年五月一三日の常務理事会において、展示施設の設置に向けた基本構想の策定を目的に、教学常務会のもとに「立教学院展示館（仮称）構想委員会」（以下、構想委員会）の設置が決定された[9]。

構想委員会は、同年六月一七日に第一回が開催され、一一月までに計三回開催され、展示館の基本方針とコンセプト、展示内容、管理運営体制、法人内各校連携体制などについて、他法人の展示施設なども参考にしつつ、検討がなされた。その結果まとめられた「立教学院展示館（仮称）基本構想（案）」が、一一月二五日の常務理事会、一二月六日の第八七三回理事会において、原案通り承認された。[10]

基本構想で提案された展示館の基本方針は、次のようなものであった。

立教大学はじめ立教学院各校の教育・研究活動は、常に社会の発展とともに歩み、社会での重要な役割を担いつつ歴史と伝統を形成してきた。

その各校の歴史と伝統を直接的に表現する展示施設は、児童・生徒・学生・教職員に対して「立教」のアイデンティティー形成、検証の場となり、また、校友、保護者、受験生、寄附者、国内外からのゲスト、地域住民など、社会一般を対象に「立教」の歴史と伝統および今日の教育・研究の取り組みを広く発信できる場となることが期待される。

展示館設置の具体的な基本方針について、以下のとおり提案する。

①立教大学はじめ立教学院各校の歴史について、制度史にとどまらず、指導的人物、建築物、風景、さらに児童・生徒・学生の学校生活の変遷を含めて展示する。

②児童・生徒・学生が、在籍する学校の歴史を学び、自校への認識を深めることによって、学校生活に積極的な関わりを促す教育的な場とする。そのため、各校の自校史に関する授業等で活用される施設とする。

③社会一般にも開かれた施設として、常設展示と並行して企画展示を実施したり、最新の展示技術を用いたりするなど、来館者に魅力的な展示を提供する。

以上のように、展示館は、立教の歴史と伝統の展示を通じて、学院内での「アイデンティティー形成、検証の場」、自校史教育を行う「教育的な場」となり、社会一般に対しては、立教の歴史と伝統のみならず、今日の教育・研究の取り組みを広く「発信できる場」となることが求められたのである。

なお、この基本方針とともに、展示施設の設置場所として図書館本館・旧館（一棟）と新館の一部が提案され、展示館の利用開始目標が二〇一四年春とされた。また、これまで仮称として「立教学院展示館」が使用されていたが、「立教学院史展示館」に変更された。

（2）事業計画化とその実施

基本構想を受け、展示館の事業計画策定のため、「立教学院史展示館（仮称）検討ワーキング・グループ」が、二〇一二年五月一一日、常務理事会のもとに設置された[11]。この検討ワーキング・グループでは、一一月一六日までに四回の会合を重ね、「立教学院展示館事業計画（案）」を策定した。記載された項目は、「基本方針」「施設計画」「展示計画」「運営計画」「展示資料について」「事業費」「スケジュール」にわたっている。

この事業計画では、以下の点が重要なポイントとなっている。

①「基本方針」について

基本構想での基本方針を踏襲したうえで、「歴史と伝統を学術的に検証し、社会に示していくことは研

究・教育機関である立教学院の重要な使命である」と、展示館設置の意義について、より踏み込んだ位置づけがなされている。

②「施設計画」について

旧館一階に事務スペース等、二階に展示スペースを設置するとされ、新館の利用は書庫の一部利用に止まり、資料センターが提案した規模からは、かなり縮小されている。

また、改修にあたっては、旧館の歴史を踏まえ、意匠、内装、空間の趣といった魅力を残すことに留意し、建築と展示を融合させた新たな空間を創出するとされた。

③展示スペース

「常設展示」と「企画展示」の二つのゾーンを設け、常設展示では立教学院の歴史をテーマ別に区分し、時間軸に沿って展開し、企画展示では常設展示のテーマと関連性を持ちながら、常設展示では表現しきれない点や、重点的に取り扱いたいテーマを設定し、来館者にとって魅力ある展示会の開催が目指されている。

④名称について

基本構想時に「立教学院史展示館」とされていた仮称を、「学術的根拠に基づいた通史の展示を踏まえ、現在、未来の立教を発信する場、また学外組織との連携や、文化活動も想定」されることから、「立教学院展示館」を正式名称とした。

⑤正課・正課外での活用

学院各校の自校史教育を中心に活用することを想定し、展示館開館後、各校と積極的に連携、協力を図

りながら教育プログラムを検討するとされた。

⑥開館までの事務体制

二〇一三年四月から、常務理事会のもとに「立教学院展示館設置準備室」を設置し、学院企画部企画課を事務局とし、大学総長室、資料センター、学院企画部広報課、学院総務部施設課など関連部局と連携、協働して業務を推進することとされた。

⑦デジタルコンテンツの積極的導入

来館者とのインタラクティブコミュニケーション機能としてデジタルコンテンツを積極的に導入し、展示物では表現できない情報の発信と、来館者のきめ細かい興味・関心に応じた情報サービス機能の充実を図り、また、最新のデジタルコンテンツを利用した展示手法の調査研究を行うこととされた。

この事業計画案は、一二月一四日の常務理事会、一二月二一日の第八九一回理事会で了承された。(12) 理事会での承認以降、検討ワーキング・グループのもとで、設置準備室の開設準備と展示業者の選定が進められた。そして、二〇一三年四月一日、準備室が設置され、展示館の開館へ向けた実務がスタートした。展示業者については、企画提案プロポーザル方式により、大日本印刷株式会社がパートナー会社に選定され、そのもとで乃村工藝社も参加することとなった。

五月一四日にキックオフ・ミーティングが開催され、以降、パートナー会社との「展示館設計実務者定例会議」および「コンテンツ分科会」をそれぞれ交互に隔週で開催することとなり、また、これとあわせて、検討ワーキング・グループのコアメンバーによる「学内定例ＭＴＧ」が学内で毎週開催されることとなった。(13)

このように、一週間を一クールとして、準備室とパートナー会社双方がそれぞれの課題をこなし、学内定例

ＭＴＧにおいて合意形成をはかりながら、問題点を解決する形で具体的な作業が進められた。開館までの一年間、開催されたミーティングは、個別のものを除いても、パートナー会社三二回、学内四六回を数えることとなった。[14]

展示制作が進められるなか、二〇一四年三月には、「立教学院展示館規程」が整備された。[15] その第一条では、「学校法人立教学院（以下「学院」という。）に、立教学院展示館（The Heritage and Future of Rikkyo. 以下「展示館」という。）を置く」とされた。[16] 前述したように、展示施設の設置は、資料センターの機能拡張という形で提案されたものであったが、大学の組織である資料センターとは別に、学校法人立教学院の組織として設置されることとなったのである。また、名称については、事業計画において「史」が削除されたことを述べたが、英語名称についても、その理由とされた「現在、未来の立教を発信する場」を踏まえたものとなっている。

第二条の目的では、「展示館は、学院内各学校の在籍者、教職員、校友等の学院関係者及び社会一般等に学院の歴史及び建学の精神を示すとともに、展示に関する資料の収集、保存及び調査を行うことを目的とする」とされ、第三条の事業については、次のように規定された。

（1）学院内における学院史の教育に資する事業
（2）展示に関わる資料の収集、整理及び保存
（3）展示館施設整備の管理運営
（4）企画展、講演会、公開講座等の企画及び運営
（5）展示に関わる資料の公開及びレファレンスサービス

（6）その他前条の目的達成に必要な事項

また、展示館の館長は学院院長をもって充てること（第四条）、展示館の運営に関する重要事項を審議するための運営委員会の設置（第五条）なども規定された。[17]

こうした準備を経て、四月一日、展示館の事業を担う「立教学院展示館事務室」が設置され、五月九日、立教学院展示館が開館した。

二　立教学院展示館の特徴

（1）展示空間

展示館は、規程に明記されているように、立教学院の「歴史及び建学の精神を示す」ことを目的とし、学院関係者はもちろんのこと、社会一般をも対象とし、機能的には、「学院内における学院史の教育に資する事業」、すなわち、自校史教育を行う「教育的な場」となることが求められていた。そのため、展示設計においては、こうした点を満たしたうえで、いかに魅力的な展示施設を創りあげるのか、という点が重要な課題であった。

展示館が設置される図書館本館・旧館[18]は、池袋キャンパスのシンボルゾーンを形成するレンガ校舎群の一つであり、九〇年以上にわたって図書館として利用されてきた歴史的な建築物でもあった。そのため、事業計画においても、「旧館の歴史を踏まえ、意匠、内装、空間の趣といった魅力を残すことに留意し、建築と展示を融合させた新たな空間を創出する」とされていたことから、「空間そのものを展示メディアとして捉える」と

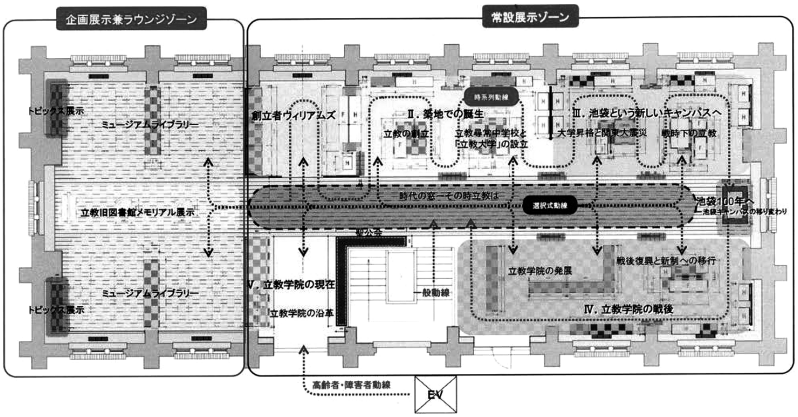

図 1

いう点にデザインコンセプトを置き、建築の持つ趣を生かしながら、空間と展示ストーリーを融合させた、体感性の高い展示を目指すこととした。(19)

このコンセプトのもと、「常設展示」と「企画展示」のスペースは、大きなチューダーアーチの窓と木組の天井梁から成るシンメトリーな空間をそのままに、建築モジュールに従って、おおよそ二対一に分割して配置している（図1）。また、南北に空間を貫く主動線も、図書館時代のままとなっている（図2）。

空間デザインにおいては、立教学院のシンボルである楯のマークをモチーフとしたインテリアスクリーン（図3）を核とし、このスクリーンの最小モジュールを基準とした寸法によって、全ての展示什器やグラフィックなどを設計している。これは、シャープなデザインの展示造形や什器が、建築の持つ歴史的な趣とコントラストを生み出しつつも、空間全体に秩序を与え、両者が融合することによって、立教らしい象徴的な空間の創出をねらったものである。

また、色彩計画や照明計画においても、空間全体の雰囲気を損なわないよう配慮し、可能な限り展示鑑賞のノイズを排除するこ

とによって、来館者が、印象的な空間を体験できるようにしている。

このような展示空間の創出にあたり、大きな課題となったのが、遮光対策であった。建物の四方の壁に大きく切られたチューダーアーチの窓は、建築の意匠において極めて重要なため、そのまま生かすこととされたが、同時に、資料の保護も考えなければならなかった。

種々検討の結果、窓には、日射透過率二一・五％、紫外線透過率一・一％の電動ロールスクリーンを設置し、窓枠が視認できる程度の外光を取り入れつつ、紫外線をカットすることとした。あわせて、セミエアタイトのオリジナル展示ケースを導入し、貴重な資料については精巧なレプリカを制作し、資料の保護を図っている。

図２

（2） 常設展示

展示スペースの多くを占める常設展示（約二〇〇㎡）は、立教の一四〇年の歩みを、建学の精神である「キリスト教主義」を核に、時系列で配置した固定展示となっている。これは、学院内での「アイデンティティー形成、検証の場」となり、立教各校の児童・生徒・学生の自校史教育を行う「教育的な場」となることが、当初の段階から強く意識されていたことによる。

展示ストーリーは、事業計画の段階まで一一のテーマを予定していたが、スペース的な限界から、八つのテーマへと組み替え、それを五つの

ゾーンに配置した。このうち、通史の核となるⅠ・Ⅱ・Ⅲのゾーンには、それぞれ二つのテーマを配置し、そのもとに三つから四つの小項目を立てている。

展示構成は、以下の通りである。

創立者ウィリアムズ

Ⅰ　築地での誕生

1　立教の創立

（立教学校の誕生／立教大学校の発足／立教大学校から立教学校へ）

2　立教尋常中学校と「立教大学」の設立

（三校体制への移行と立教尋常中学校の認可／文部省訓令第一二号と立教学院の誕生／「立教大学」の誕生）

Ⅱ　池袋という新しいキャンパスへ

1　大学昇格と関東大震災

（池袋移転と大学昇格／関東大震災による被害と復興／学園生活と忍び寄る戦争の影）

2　戦時下の立教

（対米英開戦前後／「建学の精神」の動揺／非常時における立教学院の対応／戦時体制化と学生・生徒）

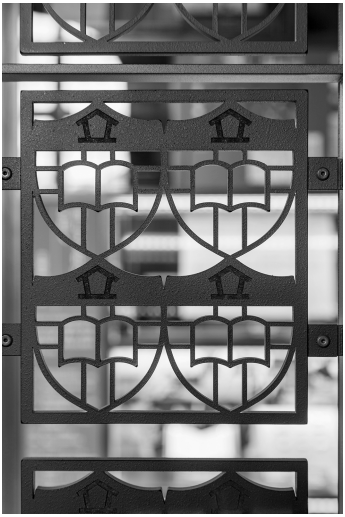

図３

Ⅲ　立教学院の戦後

1　戦後の復興と新制への移行

（戦争の爪痕／立教学院の再建と拡張計画／新制各校の発足と立教学院）

2　立教学院の発展

（立教小学校／立教中学校／立教高等学校／立教大学）

Ⅳ　これからの立教学院

（一貫連携教育と中高一貫校化／大学の総合化と充実／立教学院の未来）

常設展示スペースの中央に位置する主動線は、「時代の窓」と名づけて、各ゾーンを明確化するためのサイン機能と、各時代の概要を展開するインデックス機能を持たせている（図4）。歴史の大きな流れを概観できるとともに、各ゾーンへの導入ともなる展示となっている。また、各校の授業利用や、団体見学の際には、見学者の滞留スペースとしても機能している。

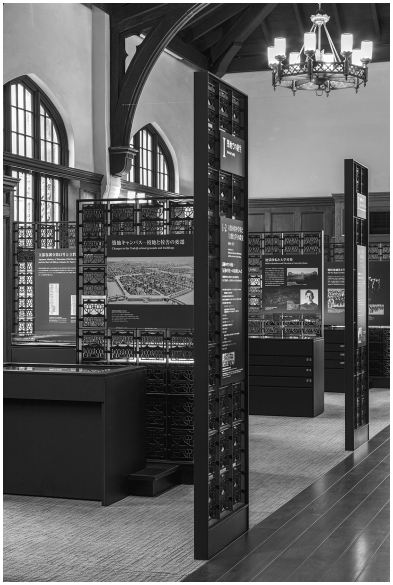

図4

展示手法とコンテンツについては、事業計画において、教育的な場であるとともに、最新の展示技術を用いた「魅力的な展示」を提供することが求められていたこともあり、体感性の高い展示空間のなかに、能動的な鑑賞を促しつつ、楽しみな

がら展示参加できるような手法を組み込んでいる。

特に、以下のようなデジタルメディアを活用したコンテンツを、各ゾーンに配置している。

①築地キャンパス――校地と校舎の変遷（ゾーンⅠ）

タッチパネルディスプレイで、築地時代の校地や校舎の変遷をインタラクティブに解説。

②「自由の学府」という沃地――花開くスポーツと学生文化（ゾーンⅡ）

タッチパネルディスプレイで、画面上を浮遊するアイコンをタッチすると、戦前の学生生活が展開。開館時は戦前のスポーツを展示。

③池袋一〇〇年へ――池袋キャンパスの移り変わり（ゾーンⅠとⅡの間）

タッチパネル式透明液晶ディスプレイとジオラマを組み合わせ、西池袋やキャンパスの変化を再現。

④情報端末（ゾーンⅠ～Ⅲ）

立教学院史のポイントがわかる子供用、展示内容を掘り下げた大人用の、二種類の端末を三つのゾーンに配置。

また、デジタルメディアだけではなく、次の二つのジオラマをゾーンⅢに配置している。

①小学校の校舎開校式

中学校の校舎を間借りして発足した小学校が、初めて専用校舎を持った時の喜びのシーンを表情豊かにディフォルメして再現。

②新座キャンパス

ジオラマと空中写真によって、高等学校の移転に始まる新座キャンパスの変化を表現。

さらに、島形に配置された展示ケースの下部には、関連資料を展示するための引き出し型のケースを設え、能動的な鑑賞を促しつつ、情報に広がりを持たせる手法をとっている。

（3） 企画展示スペース

企画展示スペース（約八〇㎡）は、建物名称にちなみ、「メーザーライブラリー・メモリアルスペース」と名づけ、フレキシブルに活用できる空間としている。通常は、図書館時代の閲覧ブースを、当時の机と椅子を活用しながら再現した空間（図5）にし、大型ディスプレイとＰＣ四台を設置し、一四本の映像コンテンツから成る「立教学院の歴史」ビデオを視聴できるコーナーともなっている。[20]

図５

企画展示を開催する際には、閲覧ブースを区切っている書架を移動し、机とともに展示什器として活用する可変的な造りになっており、少人数であれば講演会なども開催可能である。

三　展示会の開催

（1） 展示会のコンセプトと企画展

これまで確認してきたように、展示館は、基本方針において「教育的な場」であるとともに、今日の教育・研究の取り組みを「発信できる場」とされてきたことから、企画展示スペースで開催する展示会のコン

セプトについては、次の二点を想定して開館した。[21]

①学術性の高い企画展（教育型）

②学内外の組織等との共催展（情報発信型）

①の企画展は、展示館が、調査・研究の成果をもとに企画・制作するもので、展示館の中心となる展示活動である。②の共催展は、学内外の組織・機関が主催団体となり、展示館がサポートすることで開催する、コラボレーション展示である。

こうしたコンセプトのもと、二〇一四年の開館以降に開催した展示会をまとめると、表1のようになる。開館年の二〇一四年度は、常設展示の準備に追われていたこともあり、企画展を実施することができなかったが、校友が大学へ帰ってくるホームカミングデーに合わせ、その校友から寄贈された資料をもとに、一九五〇年代から六〇年代にかけての学生生活に関する展示会を開催した。

二〇一五年度から二〇二〇年度までは、毎年企画展を開催し、通算で七回を数えている。[22] 企画展を開催する場合、図書館時代の閲覧ブースを再現している状態から、大掛かりなレイアウト変更が必要となる。そのため、現状の予算規模では、基本的に年間一回の開催が限界であり、できるだけタイムリーなテーマ設定を心掛けている。

また、開館当初は想定していなかったが、第三回以降の企画展では、展示館単独での開催ではなく、次に示すように、学外機関・団体との共同主催の形を取ることが多くなっている。

①第三回企画展（二〇一七年度）

清里の財団法人キープ協会との共同主催により、戦前の立教大学の教授で、「アメリカンフットボール

の父」「清里の父」という顔を持つ、ポール・ラッシュという人物に関する展示を、生誕一二〇年という節目の年に実施した。

②第四回企画展（二〇一八年度）

「聖公会」という立教と同じ教会をルーツに持つ、香蘭女学校との共同主催により、同校の創立一三〇周年記念展示を実施した。

③第六回企画展（二〇一九年度）

全国大学史資料協議会東日本部会との共同主催により、新制大学七〇年という節目を捉え、新制大学の草創期に光を当てた展示会を実施した。

④第七回企画展（二〇二〇年度）

立教と同じく米国聖公会という教会によって設立された、聖路加国際大学との共同主催により、聖路加看護教育一〇〇周年記念展を開催した。

こうした傾向は、展示館の日々の調査・研究活動によって、さまざまな学外機関・団体との繋がりができたことが大きい。加えて、当初は、コラボレーション展示を「情報発信型」の共催展としてイメージしていたが、「教育型」の企画展として実施できるだけの、学術性を備えることができたことも大きな要因であった。

なお、各企画展では、大型ディスプレイで放映する映像コンテンツを、趣向を変えながら制作している（第四回と第七回を除く）。会期終了後には、図書館時代の閲覧ブースを再現したスペースに設置しているＰＣで、「立教学院の歴史」ビデオとともに視聴が可能となっている。

また、コロナ禍に開催した第七回企画展については、感染の拡大状況によっては開催そのものも危ぶまれる

表１　展示会一覧

2014 年度

区分	主催団体	タイトル・内容	会期
主催	立教学院展示館	2014 年度ホームカミングデー展 「校友たちの青春――躍動の 1950~60 年代Ⅰ」	2014年10月19日（日）～11月29日（土）
共催	詩人尹東柱を記念する立教の会	詩人尹東柱没後 70 年　遺稿・遺品巡回展示会 「詩人尹東柱 27 年の生涯」	2015年２月21日（土）～25日（水）
	冨安敬二教授退職記念発起人会	冨安敬二教授退職記念 「冨安敬二作品展――具象から抽象へ、そしてまた回帰としての現在」	2015年３月１日（日）～６日（金）

2015 年度

区分	主催団体	タイトル・内容	会期
主催	立教学院展示館	第１回企画展 「戦時下、立教の日々――変わりゆく『自由の学府』の中で」	2015年７月21日（火）～９月４日（金） 2015年10月１日（木）～12月８日（火）
	立教学院展示館 「池袋＝自由文化都市プロジェクト」実行委員会	「池袋＝自由文化都市プロジェクト」回遊展 「戦中・戦後の立教学院――西池袋の変化とともに」	2015年９月14日（月）～22日（火）

2016 年度

区分	主催団体	タイトル・内容	会期
主催	立教学院展示館	第２回企画展 「世界に羽ばたくスポーツ文化――『立教』の挑戦」	2016年８月１日（月）～10月16日（日）
	立教学院展示館 立教大学東日本大震災復興支援本部	リバイバル展 陸前高田復興展第５回「『つながる。陸前高田と立教大学』交流展」	2017年３月１日（水）～４月28日（金）
共催	立教大学理学部	「理学部のこころみ――体感する理学展」	2016年10月27日（木）～12月17日（土）

2017 年度

区分	主催団体	タイトル・内容	会期
主催	立教学院展示館 立教大学東日本大震災復興支援本部	リバイバル展 陸前高田復興展第５回「『つながる。陸前高田と立教大学』交流展」	2017年３月１日（水）～４月28日（金）
	立教学院展示館	トピックス展 「シリーズ立教人　尹東柱」	2017年５月20日（土）～７月22日（土）
	立教学院展示館	トピックス展 「図書館時代の面影」	2017年６月６日（火）～７月22日（土）
	立教学院展示館	トピックス展 「シリーズ立教人　長嶋茂雄」	2017年６月23日（金）～７月22日（土）
	—	野球部優勝旗展示	2017年７月31日（月）～８月５日（土）
	学校法人立教学院 清泉寮／公益財団法人キープ協会	第３回企画展／ポール・ラッシュ生誕 120 年企画 「わが人生、日本の青年に捧ぐ――知られざるポール・ラッシュ物語」	2017年８月１日（火） ～2018年２月20日（火）
	—	モータボート・水上スキー部男女アベック総合優勝 「桂宮牌」展示	2018年１月22日（月）～７月21日（土）

共催	沖縄キャンプ・フィリピンキャンプ・日本縦断 100km リレー OB・OG 有志の会	「フィールド・エデュケーション――生きた場から学ぶ立教の教育プログラム～大郷博チャプレンの働きを通して～」	2018年 3 月 1 日（木）～ 4 月27日（金）

2018 年度

区分	主催団体	タイトル・内容	会期
主催	立教大学異文化コミュニケーション学部 立教大学アメリカ研究所 立教大学大学院キリスト教学研究科 立教学院展示館 立教大学図書館	特別展 「米国における日系人収容と日系二世――「小平尚道資料」が語るもの――」	2018年 5 月26日（土）～ 7 月21日（土）
	立教学院展示館 香蘭女学校	第 4 回企画展 香蘭女学校創立 130 周年記念特別企画展 「咲くはわが身のつとめなり――香蘭女学校 130 年のあゆみ――」	2018年 8 月 1 日（水）～ 9 月28日（金）
	立教学院展示館	池袋キャンパス 100 年記念 第 5 回企画展 「歴史の舞台、池袋キャンパス――『池袋の立教』その 100 年――」	2018年10月11日（木） ～2019年 2 月23日（土）
	立教学院展示館 立教小学校	立教小学校作品展 「私の好きな立教」	2019年 3 月 8 日（金）～16日（土）
共催	沖縄キャンプ・フィリピンキャンプ・日本縦断 100km リレー OB・OG 有志の会	「フィールド・エデュケーション――生きた場から学ぶ立教の教育プログラム～大郷博チャプレンの働きを通して～」	2018年 3 月 1 日（木）～ 4 月27日（金）

2019 年度

区分	主催団体	タイトル・内容	会期
主催	立教学院展示館	トピックス展 「100 年前に誕生した池袋キャンパス」	2019年 5 月 7 日（火）～15日（水）
	全国大学史資料協議会東日本部会 立教学院展示館	全国大学史資料協議会東日本部会創立30周年記念展 第 6 回企画展 「『新しい大学』の誕生――今日の大学の原点をさぐる――」	2019年10月12日（土） ～2020年 2 月22日（土）
	立教学院展示館 立教小学校	立教小学校・6 年生絵画展 「一番好きな場所」	2020年 3 月 5 日（木）～14日（土）
共催	日本聖公会関係学校協議会	日本聖公会関係学校展「日本における聖公会の教育機関・関連施設――その創立と現在――」	2019年 7 月20日（土）～ 9 月20日（金）
	立教大学サパンヌ美術クラブ	池袋モンパルナス回遊美術館 2019 「立教大学　サパンヌ美術クラブ作品展」	2019年 5 月22日（水）～29日（水）

2020 年度

区分	主催団体	タイトル・内容	会期
主催	聖路加国際大学 立教学院展示館	聖路加国際大学看護教育 100 周年記念展 第 7 回企画展 「聖路加看護教育の 100 年――知と感性と愛のアート――」	2021年 1 月25日（月）～ 3 月 2 日（火）

状況であったため、学生リポーターが展示の様子を紹介するYouTube動画を制作し、一般公開した。[23]

（2） 共催展

学内外の組織等が主催団体となる共催展については、これまで六回開催している。主催団体の内訳は、卒業生等の団体が三回、学内が二回、学外が一回となっている。[24]

卒業生等の団体による共催展は、開館した二〇一四年度に二件の申し込みがあった。一つは、「詩人尹東柱を記念する立教の会」によるもので、立教大学にも在籍した韓国の国民的詩人である尹東柱の遺稿・遺品の展示会を、没後七〇年を期して開催した。もう一つは、造形作家でもある冨安敬二教授の退職を記念して、卒業生が中心となって組織した発起人会が主催した作品展である。二〇一七年度には、「沖縄キャンプ・フィリピンキャンプ・日本縦断一〇〇㎞リレーＯＢＯＧ有志の会」による主催で、一九八〇年代にチャペルを中心に展開されたフィールド・エデュケーションと呼ばれる、キャンパスを離れて社会の現場で学ぶさまざまな教育活動の実践を紹介する展示会を開催した。

学内のうちの一つは、二〇一六年度の「立教大学理学部」の主催によるもので、理学部が研究とは別に取り組んでいるさまざまな取り組みについて、日本大学芸術学部と共同で行っている「サイエンスコミュニケーション実践」で制作した授業作品を中心に展示を行った。会期中は、展示の内容と連動する缶バッチを製作し、展示館のエントランスにガチャガチャを設置して販売するなど、ユニークな試みを実施した。

もう一つは、大学学生部の仲介で、学生団体である「立教大学サパンヌ美術クラブ」の作品展を、毎年、池袋駅周辺地域の街中をメインの会場として実施されるアートフェスティバル、「池袋モンパルナス回遊美術館」

の一環として実施した。この共催展は、二〇一九年度に開催し、以降も継続する予定であったが、残念ながら、コロナ禍によって中断している。

学外の唯一の実施となっているのは、二〇一九年度に実施した、「日本聖公会関係学校協議会」による、日本聖公会関係学校展である。この共催展は、前年度に実施した香蘭女学校との共同主催による企画展をきっかけとして、立教を含めた日本聖公会に連なる各機関の創設者とその功績を振り返り、二一世紀の現在においてなお、その精神を脈々と受け継いでいる姿を紹介することを意図して企画したものである。

開館当初は、学外とのコラボレーションによる共催展が多くなることを想定していたが、企画展として開催するケースが増えたことにより、学外よりも校友や学内との共催展の比率が高くなっているのが特徴と言える。

（3） その他の展示会

開館当初は、企画展と共催展という二つのカテゴリーのみを想定していたが、実際に活動を始めてみると、そうした枠には収まらないような展示会の形態も発生している。

一つは、「池袋＝自由文化都市プロジェクト」実行委員会主催の、通称〝ヤミ市〟展である。この企画は、豊島区、東京芸術劇場、立教大学からなる実行委員会のもと、戦後の池袋のヤミ市をテーマに、「東京芸術劇場」「豊島区立郷土資料館」「立教大学」「江戸川乱歩邸」「婦人之友社・自由学園明日館」「ミステリー文学史料館」「新文芸坐」「池袋演芸場」「池袋西口公園」に、展示館を含む全一〇会場で、展示とイベントを開催するというものであった。展示館では、第一回企画展「戦時下、立教の日々――変わりゆく『自由の学府』の中で」の会期と接続するため、その展示内容をベースに、「戦中・戦後の立教学院―西池袋の変化とともに」と

いうコーナーを新設し、立教生の通学路にもなっていた西池袋のヤミ市の内容を加えて開催した。[25]

もう一つは、二〇一八年度に開催した、「米国における日系人収容と日系二世――小平尚道資料が語るもの――」である。この展示会は、立教大学図書館が所蔵する「小平尚道資料」をもとに、展示館と学内の他の四部署（異文化コミュニケーション学部、アメリカ研究所、大学院キリスト教学研究科、図書館）との共同主催によって開催した展示会である。牧師であり神学者でもある小平尚道氏は、日系二世としてアメリカに生まれ、第二次世界大戦下では、アイダホ州ミニドカ収容所に四年間強制収容されており、収容所で描いたスケッチをはじめ、日系人強制収容や日系二世の問題を伝える貴重な資料を多数遺していたが、同氏が立教大学文学部と同大学院文学研究科で教鞭を取っていた縁もあり、異文化コミュニケーション学部の武田珂代子教授の尽力により、立教大学図書館に寄贈されたことが、この展示会の契機となった。こうした経緯に加え、学内において、展示会に関心を持ち、参加・協力を申し出る部署が増えたことから、展示館の企画展として開催するのではなく「特別展」として開催した。[26]

以上の二つは、企画展と同様に、スペースのレイアウト変更を伴った展示会であるが、レイアウト変更を行わずに、より簡便な形でスペース全体やその一部を活用した展示会も実施している。

スペース全体を活用した例としては、二〇一八年度と二〇一九年度に実施した、立教小学校作品展がある。立教小学校では、卒業を前にした六年生が、図工の授業において、小学校の中で一番親しみを持っている場所を iPad で撮影し、その写真をもとに絵を描いている。展示会では、六年生全員が、それぞれの六年間の思いを込めて制作した作品を展示した。この企画も継続予定であったが、コロナ禍により、中断のやむなきに至っている。

スペースの一部を活用した例としては、「リバイバル展」と「トピックス展」がある。リバイバル展は、立教大学が、東日本大震災によって被災した陸前高田市に対して展開しているさまざまな支援活動の一環として、被災地の現状を本学学生や池袋をはじめとする地域の人々、東北にゆかりのある方々に伝え、引き続き復興への思いを寄せていくことを目的に、毎年、東京芸術劇場で開催している展示を、再展示したものである。

トピックス展は、「シリーズ立教人」をはじめ、タイムリーなトピックを取りあげるミニ展示である。

なお、企画展示スペースではなく、常設展示の空きスペースを使って、野球部やモーターボート・水上スキー部といった体育会の活躍を取りあげたミニ展示も実施している。

四　教育利用

（1）教育利用の概況

展示館は、設置の経緯で確認したように、学院に集う児童・生徒・学生への自校史教育を行う「教育的な場」とされている点に大きな特徴がある。実際の利用においては、各校ごとに、展示館の運営委員を中心に検討がなされ、開館年度より利用が始められた。

コロナ禍による影響が出る前の二〇一八年度までの状況をまとめると、表2のようになる。二〇一七年度に利用件数、人数ともに大幅に増加しているが、この年度を除くと、開館二年目の二〇一五年度以降、件数、人数ともに、あまり大きな変動は見られていない。

こうした傾向は、各校による授業利用が、ある程度継続的なものになっていることを示している。特に、立

表２　年度別教育利用状況

年度	件数	人数
2014	11	783
2015	16	794
2016	15	785
2017	22	897
2018	17	774

教小学校、立教池袋中学校・高等学校、立教新座中学校・高等学校の三校の場合、正課に組み入れられていることもあり、継続した利用が実現している。大学の場合は、一部の授業については繰り返しの利用となっているが、単年度の利用に終わってしまう場合もあり、年度によってばらつきがある。二〇一七年度の増加は、この大学による利用が増加したことによる。[27]

展示館では、こうした教育利用において、担当の先生方と相談しながら、解説内容の準備をしたり、ワークシート等の開発に協力したりしている。

（2）立教各校による教育利用

立教各校による教育利用の状況を、二〇一八年度を例にまとめると、表3（学校別）と表4（内訳）のようになる。[28] 以下、小学校から大学まで、それぞれの特徴について確認してみたい。

小学校による利用は、二〇一四年度の一年生「生活科」の「学院めぐり」から始まり、翌年からは、これに三年生の「社会科」での利用が加わり、六学年のうち二学年での利用が実現している。

小学校による継続的な利用は、展示館のある大学の池袋キャンパスに隣接しているため、利用しやすいという物理的な条件もあるが、いずれも授業カリキュラムの中に、「立教についての学習」が位置づけられていることが大きな

表３　2018 年度教育利用（学校別）

学校・学部区分	件数	人数	内容
立教小学校	2	240	1 年生「学院めぐり」、3 年生「社会科見学」
立教池袋中・高	3	307	英語、選科
立教新座中・高	1	30	中学 1 年生社会科（校外学習）
立教大学（文学部）	2	32	「キリスト教学基礎実習」、授業課題
立教大学（学芸員課程）	2	62	「校内実習Ａ」「博物館経営論」
立教大学（教職課程）	3	10	「社会・地理歴史科教育法」
立教大学（GLAP）	1	20	
その他	3	73	清里小学校、池袋中高教職員研修、大学職員内定者研修
総計	17	774	

要因となっている。同校では、十数年前から、「立教単元」が設けられ、社会科において、一年生から六年生まで、段階的に「母校立教を学ぶ」という試みがなされてきた。しかし、生活科のスタートに伴うカリキュラムの変更により、展示館を利用した、現在のような形になっている。(29)

一年生の生活科では、大学のキャンパスを散歩しながら、チャペルや図書館といった建物などを見学するコースの中に、展示館の見学が組み入れられている。また、三年生の社会科では、大学の建物名称となっている人物や、小学校の歩みに関する展示を見学した後、まとめとして、見学した内容をもとに、二名ペアで新聞を作成している。

小学校と同じく、大学の池袋キャンパスに隣接する立教池袋中学校・高等学校では、英語科での利用が継続的に行われている。当初は、中学一・二年生、二〇一七年度以降は、高校生の授業利用となっている。

英語の授業による利用となっているのは、担当する先生の「立教の教育の原点の一つ『英語』の授業で、学校の歴史に触れること。『立教の一員』であることを自覚し、『立教で英語を学ぶこと』を共

表４　2018 年度教育利用（内訳）

年／月／日／曜日	来館者数	教育利用
2018年４月12日（木）	20	【池袋中高】高校３年生選科・原真也先生
2018年４月23日（月）	24	【大学】文学部キリスト教学科「キリスト教基礎実習」・ミラ・ゾンターク先生
2018年５月17日（木）	20	【その他】清里小学校（20 人）
2018年５月30日（水）	120	【小学校】３年生「社会科見学」（3 クラス）
2018年６月21日（木）	20	【大学】GLAP・中込さやか先生
2018年７月24日（火）	30	【新座中高】中学１年生「校外学習」･田中麻子先生
2018年８月31日（金）	49	【その他】池袋中高・教職員研修
2018年９月22日（土）	22	【大学】学芸員課程「校内実習」
2018年10月１日（月）	4	【その他】大学人事課・職員内定者研修
2018年10月15日（月）	40	【大学】学芸員課程「博物館経営論」・川口幸也先生
2018年12月７日（金）	8	【大学】文学部教育学科・授業課題
2019年１月７日（月）	10	【大学】教職課程「社会・地理歴史科教育法」・奈須恵子先生
2019年１月10日（木）	72	【池袋中高】高校２年生英語･菊池亮子先生（クラス半分×4）
2019年１月11日（金）	72	【池袋中高】高校２年生英語･菊池亮子先生（クラス半分×4）
2019年１月15日（火）	18	【池袋中高】高校１年生英語・菊池亮子先生（クラス半分）
2019年１月18日（金）	45	【池袋中高】高校１年生英語・菊池亮子先生（1 クラス、クラス半分）
2019年１月21日（月）	65	【池袋中高】高校１年生英語・菊池亮子先生（2 クラス）
2019年１月25日（金）	5	【池袋中高】中学１年生選科・牟田俊平先生
2019年２月１日（金）	10	【池袋中高】中学１年生選科・牟田俊平先生
2019年３月１日（金）	120	【小学校】１年「生生活科」（3 クラス）

に考える機会」[30]とする、との着想によるものである。授業にあたっては、常設展示や企画展示の内容を踏まえたワークシートを、毎年作成するなど、立教の歩みを英語教育に融合させる、ユニークな試みがなされている。

英語科以外にも、「選科」という自由選択科目での利用がなされているが、二〇一八年度は、中学一年生「立教の歴史」と、高校三年生「沖縄学」による利用があった。

新座キャンパスにある立教新座中学校・高等学校については、展示館のある池袋とは距離が離れているため、通常の授業における利用は、物理的に難しい状況にある。そのため、中学校一年生「社会科」の校外学習での利用のみとなっている。

郊外学習のコースは八コースあり、各生徒はいずれか一つのコースに参加する形になっているため、展示館を含むコースの利用者は、学年二〇〇名のうち、多くても三〇名程度であり、学年すべての生徒が展示館を訪れる機会とはなっていない。しかし、郊外学習の事前指導において、「立教学院の歴史」ビデオを視聴するなど、展示館を有効に活用するための工夫がなされている。[31]

大学については、学芸員課程の「校内実習」「博物館経営論」や、教職課程の「社会・地理歴史科教育法」などで、継続的な利用が見られている。[32] これ以外にも、複数年にわたる利用も見られたが、担当教員の定年や任期終了により、利用が途絶えてしまう場合もあった。小・中・高の場合は、定期的な利用となっているが、大学の場合は、担当教員の興味・関心によるところが大きいため、開催している企画展の内容によっても、振れ幅が大きくなる傾向がある。

また、大学の場合、クラスサイズが大きな授業も多く、展示館を活用するのが、そもそも規模的に難しいという問題がある。そのため、受講生が一斉に利用する形ではなく、展示館の見学を課題として出し、学生が個別に利用するような形をとっている授業もある。このようなケースでは、団体見学という形ではないため、事前の連絡や相談がない場合もあり、展示館側で把握しきれていない利用も発生している。

以上、立教各校による利用状況について簡単に触れたが、これ以外にも、他大学による利用や、教職員への研修、学芸員課程の「博物館実習」の実習生受け入れなど、「教育に資する事業」を展開している。

おわりに

立教学院展示館は、本稿で確認したように、創立一四〇年という節目の年に、立教初となる展示施設として開館した。図書館の本館機能の移転というタイミングを捉えたことにより、これまで難しかった展示施設を実現できたことは、立教の歴史においては大いに意義あることと考える。また、立教を象徴するレンガ校舎の一つに設置されたことにより、建物の持つ魅力と展示を融合させた、立教らしい、印象的な空間を創出できたのではないだろうか。

ただし、展示館の設置過程における全学的な議論の結果、大学の組織である資料センターの機能拡張という形ではなく、学校法人立教学院に、新たに別の組織として設置されたことにより、立教に関する歴史資料を扱う部署が、学院内に二つ存在することとなった。展示館においては、すでにある資料センターを機関アーカイブズとして位置づけ、展示館は、展示での活用を前提とした、収集アーカイブズとしての役割を果たすべく、主に校友からの寄贈資料を中心に収集している。しかしながら、両者の役割分担が、必ずしも明瞭ではないため、あいまいな点も存在している。学院・大学として、歴史資料を扱う部署をどのように考え、位置づけていくのか、今後のさらなる検討が求められるところである。

展示会については、当初想定した枠組みにとらわれず、可能な限り開催数を増やす努力をしてきた。こうした取り組みによる顕著な効果としては、一つには、入館者数の増加があげられる。開館年の二〇一四年度は一一、七二二人だったが、展示会の開催数の増加と歩調を合わせるように増加し、二〇一八年度には一五、七四六

人を数えるまでとなった。入館者数の多寡をもって、展示館の活動を評価されたくはないが、学内広報的には重要なデータともなっている。

もう一つは、資料や情報を呼び込む効果である。展示館では、展示会の開催案内や企画展の図録などを、資料を提供くださった校友などに送付しているが、そうした繋がりの中で、何度も展示館に足を運び、繰り返し資料を提供いただくことも多い。また、同級生や先輩・後輩などに、その輪が広がり、貴重な資料や情報に巡り合うこともしばしばである。展示には、情報発信のみならず、こうした効果があるものと実感している。

教育利用については、各校の先生方の協力により、ある程度、繰り返しの利用が定着化していると言える。しかし、キャンパスが離れている立教新座中学校・高等学校については、来館が難しい状況を考慮して、出張展示の実施や、オンラインを通じたコンテンツの提供など、更なる取り組みが必要と言える。

また、大学については、学生・教職員へ向けた学内広報を強化する必要性を痛感している。新入生のオリエンテーションや、広報メディアへの協力など、さまざまな形で、展示館の存在をアピールする努力はしているが、認知度はまだまだのようである。展示館は、正門を入ってすぐという、一般の来館者に対しては好立地にある。しかし、肝心の学内関係者の動線からは外れてしまっており、大きなサイン表示も、学内ルールの関係で実施することができない状況にある。大学の教育利用を活性化させるためには、これまで以上に、展示館の認知度を高めていくことが課題となっている。

二〇一四年の開館から八年目を迎え、そろそろ常設展示のリニューアルを検討すべき時期に来ている。特に、デジタルメディア展示については、機器の更新は必須であり、コンテンツについても、さらに魅力的なものにしていく必要があろう。加えて、新型コロナウイルスの感染拡大により、オンラインでの情報発信も不可

欠のものとなっている。

課題は尽きることがないが、「アイデンティティー形成、検証の場」、「教育の場」、「発信できる場」としての役割を与えられた「立教学院展示館」を、より魅力的なものとしていけるよう、模索を続けていきたい。

注

（1）『立教学院百二十五年史』の編纂経緯については、永井均「校史研究の営み――『立教学院百二十五年史』の編纂経緯に関する覚書」『立教フォーラム』（第八号）、二〇〇一年、三八～五七頁に詳しい。

（2）立教学院史編纂室「「立教学院史資料センター」発足」『立教フォーラム』（第八号）、二〇〇一年、五八～六三頁。

（3）詳しくは、資料センターのホームページを参照。https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/rikkyo_archives/research_results.html

（4）学校法人立教学院は、立教大学、立教新座中学校・高等学校、立教池袋中学校・高等学校、立教小学校を設置しており、「立教学院院長」は、「法人及びこの法人の設置する学校相互間の教育に関する事項を統括」することを役割としている（「学校法人立教学院寄附行為」）。

（5）資料センターでの検討経緯については、拙稿「展示計画の構想から実現まで――立教学院展示館が目指したもの――」『立教ディスプレイ――立教学院展示館年報』（創刊号）、二〇一六年、一七～二三頁。

（6）教学常務会は、「法人及びこの法人の設置する学校相互間の教育に関する事項を協議」することを役割とし、院長が主宰している（同前）。

（7）常務理事会は、「法人の業務を執行するとともに、重要事項を協議して理事会に提案」することを役割とし、理事長が主宰している（同前）。

（8）田畑衆一郎「開館に至る経緯」『立教ディスプレイ――立教学院展示館年報』（創刊号）、二〇一六年、七～一五頁。

（9）この委員会は全学的な委員会で、学院院長（委員長）と副院長（副委員長）、企画担当理事兼大学統括副総長、資料センター長と副センター長、大学図書館長、学院総務部長と企画部長、各校代表（新座中学校・高等学校、池袋中学校・高等学校、小学校）で構成され、事務局は学院企画部企画課が担当している。

（10）前掲、田畑「開館に至る経緯」。

（11）このワーキング・グループも全学委員会で、院長（座長）、企画担当理事兼大学統括副総長（副座長）、教学常務会部長会選出理事、資料センター副センター長、学院総務部長と企画部長、各校代表（新座中学校・高等学校、池袋中学校・高等学校、小学校）で構成され、事務局は学院企画部企画課が担当している。

（12）前掲、田畑「開館に至る経緯」。

（13）前掲、拙稿「展示計画の構想から実現まで」。なお、「展示館設計実務者定例会議」については、ほどなく毎週開催となった。

（14）同前。

（15）前掲、田畑「開館に至る経緯」。

（16）「立教学院展示館規程」については、『立教ディスプレイ――立教学院展示館年報』掲載の、各年度の事業年報を参照されたい。

（17）運営委員会も全学委員会で、館長、副館長、総務担当理事、一貫連携担当理事、企画部長、総務部長、資料センター長、学院各校の教職員のうちからそれぞれ一名、その他館長が特に指名する者（若干名）で構成される。

（18）図書館本館・旧館は、二〇一二年一一月六日、図書館本館としての役割を終え、新館とともに、「メーザーライブラリー記念館」へと名称変更された。

（19）展示設計については、以下の論考に詳しい。北村豊「立教学院展示館の設計にあたって」および、西野晃「立教学

院展示館の展示設計にあたって」『立教』ディスプレイ――立教学院展示館年報』（創刊号）、二〇一六年、二五～二八頁、二九～三四頁。

（20）映像コンテンツは、次の一四本である。①立教のルーツ―聖公会の歴史、②創立者ウィリアムズ、③ミッション・スクール存続の危機―文部省訓令第一二号問題、④関東大震災による被害と復興、⑤日米開戦と立教、⑥幻となった医学部、⑦学徒出陣、⑧はじめての女子学生、⑨新制各校の発足、⑩立教小学校―設立から大切にしてきたもの、⑪立教中学校―理想の教育を求めて、⑫立教高等学校―新しき文化の理想、⑬国際交流のはじまり、⑭新座キャンパスの開校。なお、制作はＮＨＫエデュケーショナルによる。

（21）二〇一八年度までの展示会の開催については、拙稿「立教学院における展示への取り組み――立教学院展示館の活動を中心に――」『立教ディスプレイ――立教学院展示館年報』（第三号）、二〇一八年、一～八頁。

（22）各企画展の詳細については、それぞれ展示図録を発行しているので、そちらを参照されたい。

（23）展示館では、新型コロナウイルス感染症対策のため、二〇二〇年三月一七日から臨時休館となった。一一月二四日から学内関係者向けに開館を再開したが、大学キャンパスの入構規制が続いていたため、第七回企画展は、学内関係者と聖路加国際大学関係者向けの限定的な展示となった。なお、一般向けの開館は、二〇二一年一一月一五日に再開した。

（24）共催展については、『立教ディスプレイ――立教学院展示館年報』掲載の各年度の展示記録を参照されたい。

（25）展示内容については、拙稿「「池袋＝自由文化都市プロジェクト」における立教学院展示館の展示について」『大衆文化』（第一四号）、二〇一六年、三一～四四頁を参照されたい。

（26）この特別展については、『立教ディスプレイ――立教学院展示館年報』（第四号、二〇一九年）の特集（一～三七頁）と図録（八三～一三二頁）を参照されたい。

（27）二〇一七年度の利用状況については、「２０１７年度立教学院展示館年報」『立教ディスプレイ――立教学院展示館

年報』（第四号）、二〇一九年、六八頁を参照されたい。

（28）二〇一六年度までの教育利用の状況については、拙稿「特集にあたって――立教学院展示館の教育利用」『立教ディスプレイ――立教学院展示館年報』（第二号）、二〇一七年、五～七頁を参照されたい。

（29）遠山章夫「小学校における展示館を利用した学習活動について」『立教ディスプレイ――立教学院展示館年報』（第二号）、二〇一七年、九～一五頁。

（30）菊池亮子「Forever and a day. 立教池袋中学校英語 Practicum 授業での立教学院展示館見学について」『立教ディスプレイ――立教学院展示館年報』（第二号）、二〇一七年、一八頁。

（31）田中麻子「立教新座中学校一年生の展示館利用状況について」『立教ディスプレイ――立教学院展示館年報』（第二号）、二〇一七年、三七頁。

（32）教職課程による事例については、奈須恵子「社会科・地理歴史科における博物館・資料館の授業活用について――「社会・地理歴史科教育法」における立教学院展示館見学の試みを通して――」『立教ディスプレイ―立教学院展示館年報』（第二号）、二〇一七年、四一～四七頁に詳しい。